

相棒 あなたの  
拡大版



人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第15回目は、創業83年、老舗小型鉛筆削り器メーカーである三宅の「中島重久堂」を営む中島潤也さんです。

良いものを作るため一致団結



中島重久堂は、昭和8年創業の国内唯一の小型鉛筆削り器専門メーカーだ。初めはプラスチック製品を作っていたそうだが、昭和15年より鉛筆削り器だけに絞っている。最初に工場見学をさせて頂いた時、鉛筆削りの刃を作る工程を説明してもらった。幅1cm足らずの細長い鉄の帯が、どんどん研磨されて切断され、小さく鋭利な刃物に変わってゆく。社長の潤也さんに「機械で怪我をすることはないですか」と聞くと、「ほとんど怪我はないねえ。とにかく作業は安全第一。怪我は、怪我をした本人にとってももちろん痛手やけど、会社にとっても大きな痛手やから、一番気をつけてるかな」と教えてくれた。

次に、従業員がほとんど女性である理由を尋ねると次のように語った。

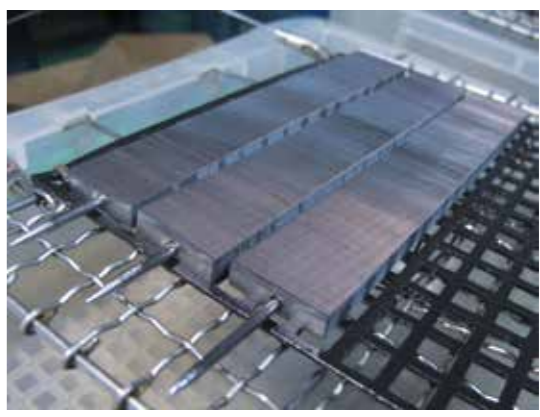


てくれた。「女性の中でも、子育てが一段落した女性を積極的に雇用してるねん。理由はマネジメント力。家庭の中で、色んなことをやりくりしながら子育てという大仕事をやってきた女性は、若い人と比べると格段にマネジメント力が高い。こういう方を大切にして、長い間、安定して働いてもらえるようにしてる」(なるほど、そんな見方があるんだと感心)

「やりがいが一番感じるときはどんな時ですか」という質問をしました。すると「若いときは、仕事に対する夢とか展望とか、色々考えるかもしれないけど、長年やっていることと至って単純。良い商品を作って、それを買ってくれた人に喜んでもらう、それが一番」こう話す表情はとても穏やかだった。

「相棒」を聞いてみると、微笑みながらおっしゃった。「鉛筆削りで一番大事なのは切れ味。それを作ってくれるのが『研磨機』。朝スイッチをONにするときは『おはよう』、仕事が終わってOFFにするときは『おつかれさま』とちゃんと声を掛けるんやで」

文 篠原遼太郎(二年)



※今回掲載しきれなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。



文 山田真里江 (二年)

鉛筆削り器そのものが想いを表現していると感じ、「そういう伝え方もあるんだ」と私は嬉しくなった。鉛筆削り器とともに思い出が生まれてくる。そう思うと私は胸が熱くなった。

「TSUNAGO」は単に鉛筆をつなぐだけではなく、人と人もつないでいる。鉛筆削り器そのものが想いを表現していると感じ、「そういう伝え方もあるんだ」と私は嬉しくなった。鉛筆削り器とともに思い出が生まれてくる。そう思うと私は胸が熱くなった。

「TSUNAGO」というネーミングは、潤也さんが自ら考えた。「この鉛筆削り器を使うとき、鉛筆とともにある記憶を呼び覚まし、想いをつないで欲しい」という。若い子の中には、好きな人の鉛筆をつなげたり、成績優秀な人の鉛筆をつなげたりして、験担ぎやおまじないのようにして遊ぶ子どももいるそうだ。「TSUNAGO」は単に鉛筆をつなぐだけではなく、人と人もつないでいる。

結果は、グッドデザイン賞や文房具屋さん大賞2016も受賞し、たくさん注文がくる大ヒット商品になった。「大きな売り上げは追求せえへんねん。伝えたい想いが薄まってほしくないんや」と潤也さんは語る。生産量がある程度に制限し、売り上げの一部は森林保全のために寄付をして、利益を還元しているという。

未来につなぎたい想い



それは、北陸のある発明家からの一本の電話によって始まった。これまでも、さまざまな鉛筆削り器の製品化依頼があったらしいが原則断ってきたという。しかし、その発明家のアイデアは、潤也さんの心を動かした。コンセプトは「もったいない」「ものを大事にしよう」。短くなって使えない鉛筆を別の鉛筆とつなげて、再び使えるようにするための鉛筆削り器。

製品化には、1000万円を超える投資が必要だったという。「売れる」という保証はない。それでも国の補助金やクラウドファンディングという制度も利用し、2年掛けて製品化を実現した。「鉛筆と鉛筆をびつたりくつつける精度を生みだすのが大変だった」と振り返る。

結果は、グッドデザイン賞や文房具屋さん大賞2016も受賞し、

たくさん注文がくる大ヒット商品になった。「大きな売り上げは追

求せえへんねん。伝えたい想いが薄

まってほしくないんや」と潤也

さんは語る。生産量がある程度に

制限し、売り上げの一部は森林保

全のために寄付をして、利益を還

元しているという。